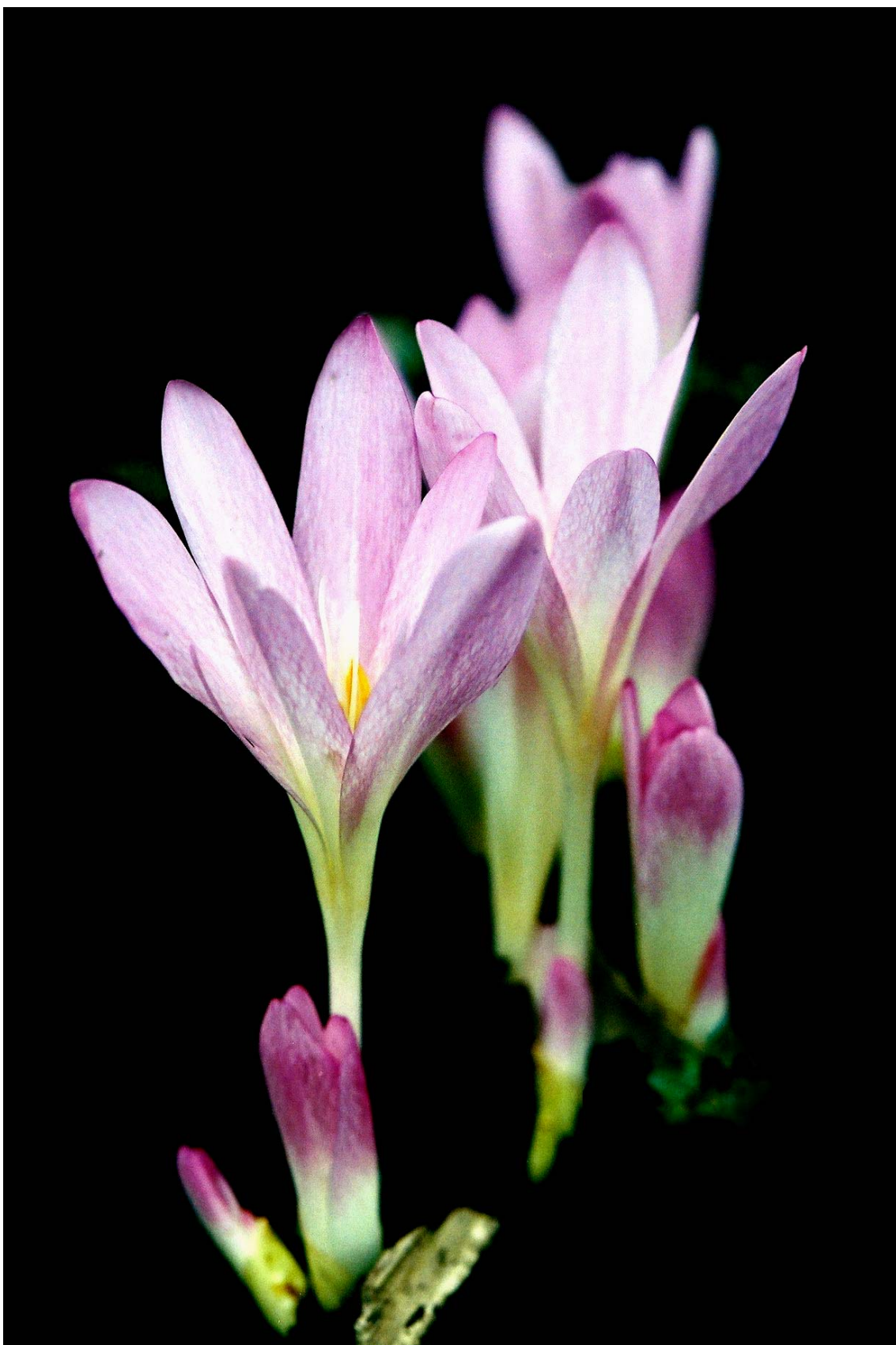


11) コルチカム

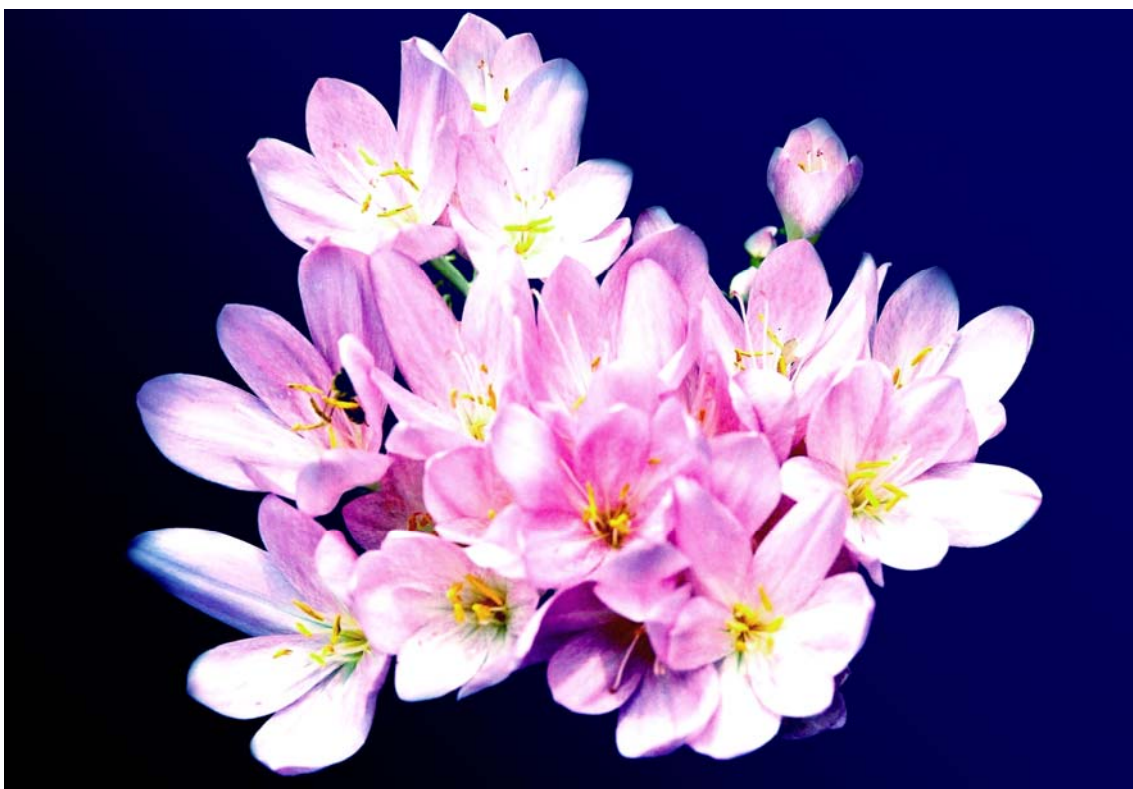
コルチカムはユリ科コルチカム属の総称で、西アジアに約 60 種が分布する。園芸的には交配により、さまざまな品種が作り出され、中でもよく栽培されている品種はイヌサフランと呼ばれるもので、北アメリカとヨーロッパが原産の球根草である。球根は 5~7cm と大きく、褐色の外皮で覆われる。花は 9~10 月頃、葉に先がけて高さ 10~15cm の花茎を伸ばし、サフランに似た淡紫紅色の 6 弁花を開く。その後、春先にかけて葉が出るものの夏には枯れて休眠し、再び秋に花を開く。丈夫な植物で夏に掘り挙げた球根は、机の上でも花を開くために、最近ではどこの園芸品売り場でもよく売られている。イヌサフランの学名は『*Colchicum autumnale*』で、属名は「コルクス地方の」というギリシャ語『kolchikon』に由来し、この花が黒海東部のコルクス地方に見られたことによるもので、種小辞は秋咲きのという意味である。繁殖は分球によるが、植え時は花を楽しんだ後すぐに路地植えすればよい。

コルチカムの球根には有毒なアルカロイド(05-02-00 参照)『コルヒチン』を含んでおり、ギリシャの博物学者ディオスコリデスも、有毒植物としてドクキノコと同じように取り扱ってきたが、その一方で少量のコルヒチンを用いて痛風の薬にもしてきた。また 1937 年にはアメリカの植物学者 A.F.ブレイクスリーが、コルヒチンには植物の染色体を倍加させる作用があることを発表し、にわかに関心を浴びることとなった。この発見により、コルヒチンは種子無しスイカや種子無しブドウなどの植物の、育種上なくてはならない重要な物質となっていったのである。

コルチカムは大変丈夫な植物ではあるが、酸性土壌では育ちにくく、弱アルカリ性の土を好む。このため連作を続けていると次第に球根が細り、やがて消えてしまうことが多い。時々石灰を入れて土を弱アルカリ性にしておくことが大切である。植物の中にはこのように、土壌が合わずに枯れてしまう物は少なくない。特にこうした植物の中には、地中海沿岸を原産とし酸性土壌を嫌うものと、石南花や躑躅の仲間のように、アルカリ土壌を嫌うもの、苧環(オダマキ)や女郎花(オミナエシ)のように、単に同じ場所に連作されることを嫌うもの、サボテンなどの多肉植物や着生蘭のように湿地を嫌うもの、また逆に芹(セリ)や花菖蒲のように乾草地を嫌うものなど、さまざまである。植物の性質にあった土壌と土質を選別することが重要である。この他の要素は陽当たりか日陰か、多肥を好むか否か、病虫害におかされやすいか否か、剪定をするか否かぐらいで、ほとんどの植物はこうした要素の組み合わせで、栽培方法が決まるといっても過言ではない。それぞれに例外はつきものではあるが、地中海沿岸が原産地であれば、陽当たりがよい弱アルカリ性の土壌に、球根であれば乾草気味で砂混じりの土に植えるとほとんど間違いない。そして栽培法がわからない場合は根を見て、鬚根の多いものは湿り気の多いところに、太い根がパラパラと出ているものは、乾草気味の土を好むことを覚えておくと、役立つことが多い。



土も水もないテーブルの上でも花を咲かせるイヌサフラン(東京都小平市薬用植物園)。



球根には有毒成分コルヒチンを含むが、これは種無しスイカや種無しブドウを作るためには欠かせない成分であり、痛風の薬でもある(東京都小平市薬用植物園)。



アルカリ性の土を好むので、石灰を入れる必要がある(小平市薬用植物園)。

[目次に戻る](#)